

A-31

夏の歌



特47

795



歌

山  
村  
暮  
鳥



夏の歌

ええ 私

その麗美人草を記憶します。

ええ その……

けれど私の眸からいまは心の

敷石に

句ひも色も消へました。

ええ、其處はわまい泪の

廣園です。

わあなたのお顔を忘れると、

忽ちうすい水色の浴衣をかけた此肌の

悲しい影が

歌ひます。

ええ、夕立の氣まぐれあ！

### 虎や横町

南瓜よ！ 蔓に花がさき、

こころの蜂よ！

蜜に酔ふ時

二階では夏と、

黄色が光ります。

辻の小さい交番所

畫が土塀に

這ひよるご、

悲哀も慾もあくあります。

おゝ罪のあい莖妓の

お前等は、

三味線をまくらの午睡？

### 三十前後の男女の對話

洞落から、

あれ、あだらかな傾斜の上に平安と

空の紫紺がとけ合ふて、

眼の神経が燦ります。

蟬でせう？ 啞のやうな光線の

かおしみ、ね、

其の沈黙に群るのは  
WATER-FANのおもひでの花ね。

彼處を大きな反射の「美」が夢のやうに  
すべります。  
塊りがたい雲が逝きます。  
おゝ河岸に立つ裸の影畫！

WATER-FAN、みづうちは。

## 夏の別離

お慕には百日紅が咲きました？  
われ！ 昨夜の泪が  
梢から風もあいのに、  
ばらばらと乾いた土へこぼれます。  
風もあいのに……

河端の柳がゆれます。

風もないのに、  
茄子の馬の片脚が路傍に  
折れて、  
何處かで蟲が啼いています。

あゝ夏よ。

「ひとあしお先へ……」

# 光

お前等の窓の外にも雑草が

生え、

花の黄色が夏のころを浮べたでせう。

あれ！ うらの田圃では

蛙が雨をよんでいます。

薄暮の製絲場の門前

粹<sup>い</sup>あわたまの角刈<sup>かど</sup>の  
銀<sup>ぎん</sup>ちやんによく似<sup>に</sup>た男<sup>おとこ</sup>の通<sup>とほ</sup>る時<sup>とき</sup>  
電<sup>でん</sup>燈<sup>とう</sup>の光<sup>ひかり</sup>りが鈍<sup>鈍</sup>くおちる時<sup>とき</sup>  
煙<sup>えん</sup>突<sup>つ</sup>の上<sup>うへ</sup>に、  
大<sup>おほ</sup>きお圓<sup>まる</sup>い月<sup>つき</sup>を見<sup>み</sup>たらば記<sup>き</sup>憶<sup>おく</sup>が無<sup>む</sup>智<sup>ち</sup>の  
長<sup>なが</sup>い睫<sup>まつげ</sup>毛<sup>げ</sup>をぬらすでせう！

あゝお前<sup>まへ</sup>等は若<sup>わか</sup>いのだから  
歌<sup>うた</sup>つておくれ、  
流<sup>は</sup>行<sup>り</sup>の唄<sup>うた</sup>を……

流<sup>は</sup>行<sup>り</sup>の唄<sup>うた</sup>を……  
蛙<sup>かえる</sup>に呼<sup>よ</sup>ばれて雨<sup>あめ</sup>のふる時<sup>とき</sup>



264

333

明治四十三年九月十五日印刷  
明治四十三年九月十八日發行

(書費金五錢)  
(郵税金貳錢)

著者

山村 恭島  
仙臺市定禰寺通柳町五番地

印刷所

早川 活版所  
仙臺市片平丁(電話八六〇)

印刷人

千葉 新治  
仙臺市片平丁二十五番地

發行人

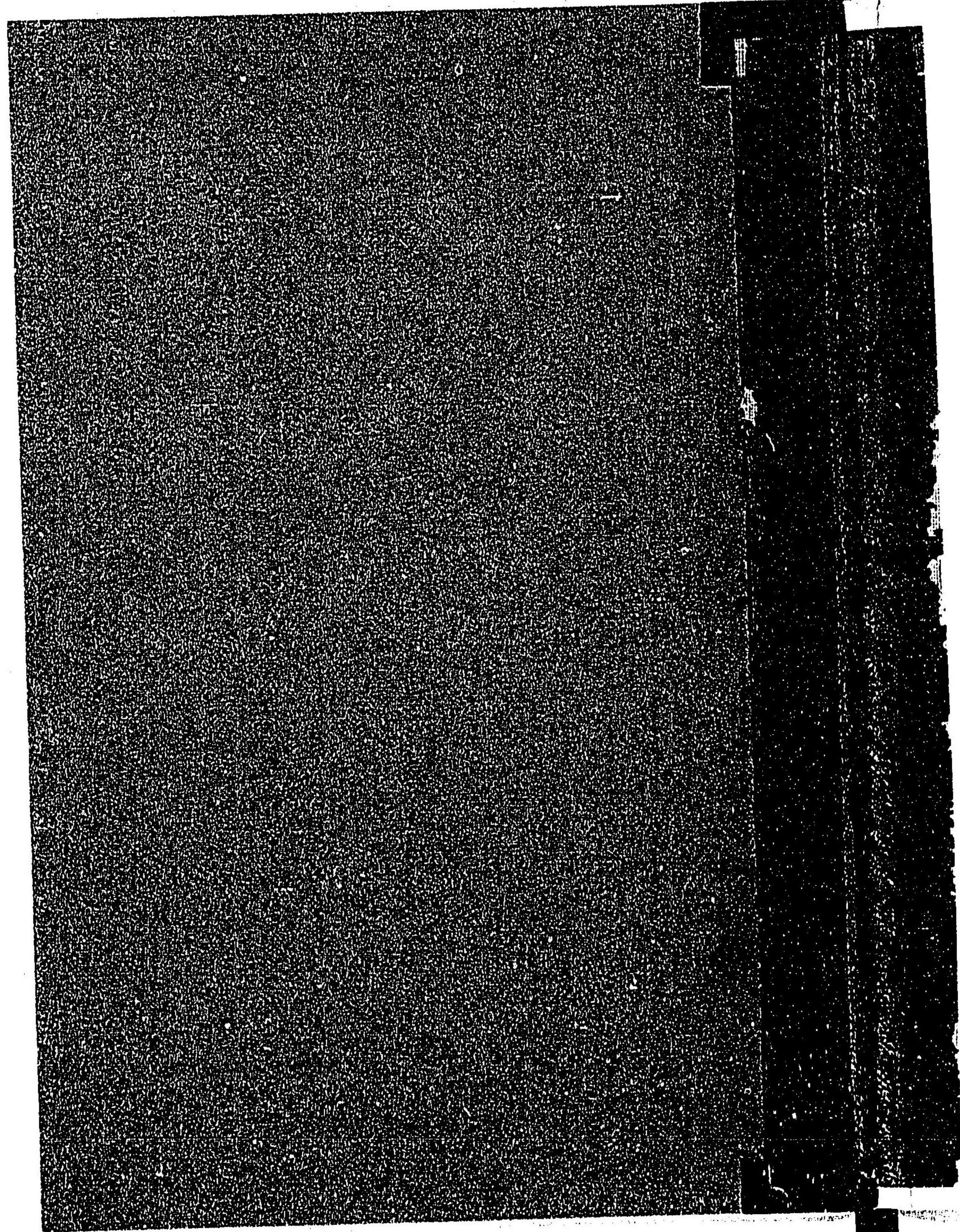
新妻 莞爾  
仙臺市片平丁四十五番地

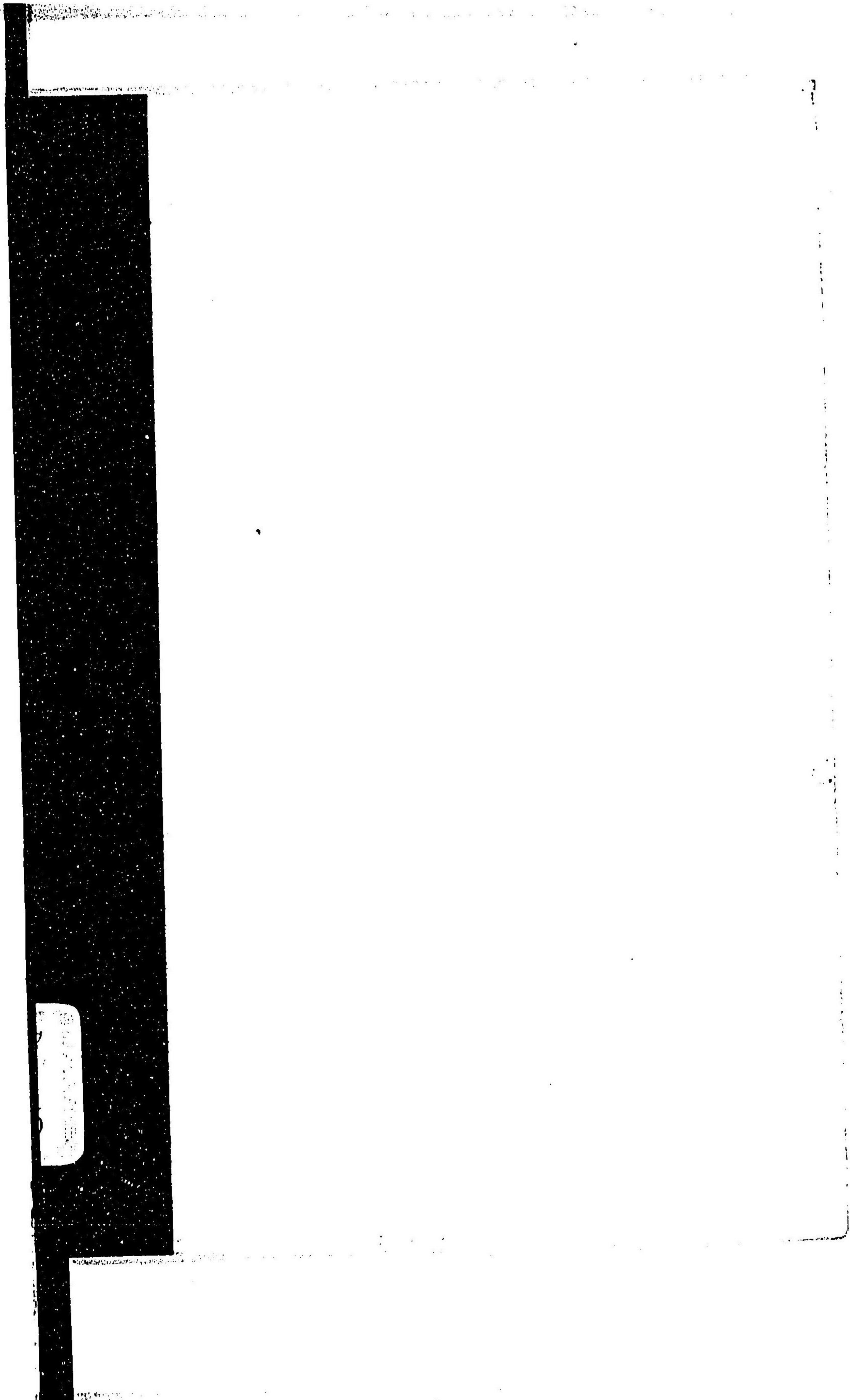
發行所

松榮堂書店  
仙臺市大町四丁目(電話五三三)

A-31







Small, illegible text or markings on a dark background.

夏の歌  
山村暮鳥  
国立国会図書館

特  
7

088066-000-6

特47-795

夏の歌

山村 暮鳥/著

M43

DBG-0163

